
領域名：教養科目・専門関連科目

報告者：金城 芳秀

教育及び実践の課題

2020年の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックにより、オンライン授業あるいは分散登校・授業が継続されている。県内のCOVID-19の感染状況では、学内施設の使用制限、課外活動の禁止、Web会議（Zoom）への切り替えなど、やむを得ない感染拡大防止対策により、学生も教職員もストレス環境に置かれている。とくに、コミュニケーションの不足は、学生の不安感や疲労感を増大させるリスクである。

活用した論文の概要

Patel & Chrisman (2020)は、ロジャースの革新的方法を用いたインシビリティの概念分析から、**先行要件**はインシビリティの文化と権威の勾配（power gradient）であり、**属性**は個人を中傷する、見下す、排除するなど、言語または非言語の行動であり、その**帰結**は心理社会的苦痛と生理学的苦痛（うつ、胸痛、血圧上昇など）と報告した。この概念を表すモデルケースとして、臨地実習で学生が看護師から受ける負の体験、例えば、看護師が学生を無視する、助言を求める学生に侮蔑的で見下す態度をとる、学生を患者ケアから外すなどが含まれた。このようなインシビリティは学生に心理社会的苦痛（不安、自信あるいは自尊感情の低下など）を与え、進路選択を含めて学生の専門職人生へ悪影響を及ぼすとの指摘である。

教育及び実践への活用

COVID-19のパンデミックが収まらないなか、学生とのコミュニケーションにはPAAIL戦略（Clark&Fey, 2020）を意識した。例えば、「保健医療情報演習」では、[正確には知らないこと]で演習ノートの不足を補った。その際、演習課題（データ解析）に対する「自信がない」「苦手意識」「分からない」をForms（MS社Office365）で収集後、学生の学術的負荷の軽減を意図する、個人あるいはクラス全体へのフィードバックを行った。また、オンラインのグループワークとなった「疫学と保健医療情報」と「ゼミナールⅠ」は、コミュニケーション不足が想定されたため、Zoomブレイクアウトルーム利用（授業時間内外）、オフィスアワー・Zoomウィーク（2時間/日）を設定した。利用実績は、それぞれ1～3チーム/日、1～2人/日であり、教員との対話の機会として積極的に活用した学生は少数であった。自宅の学習環境に制約がある学生は一定数いることから、一定数の学内Zoomブースを設けること、個人の貢献が把握しやすい課題内容や成績の評価方法など、さらに工夫が必要である。

参考文献

Patel S.E., Chrisman M. (2020). Incivility through the continuum of nursing: A concept analysis. Nurse Forum. 55(2), 267-274.

(再掲) Clark C.M., Fey M.K. (2020). Fostering Civility in Learning Conversations: Introducing the PAAIL Communication Strategy. Nurse Educator 45(3):139-143.
